

静岡県 西部発 環境をキーワードに人と企業、地域をつなぐビジネス情報誌

econowa 3

<http://econowa.org/>



Mottainai Blues

今ここにある資源、使わなきゃもったいない。

FREE

econowaは誰でも
ご自由にお読みいただける
フリーペーパーです。

伐らないなんてもったいない

天竜美林は宝の山だ

江戸時代から戦後の復興期まで、首都圏の需要に応える木材供給基地として栄えた「天竜美林」。しかし現在、林業の衰退によりその多くが荒廃の危機にさらされています。

天竜川の治水に尽力した金原明善翁は「山と川は国土経営の基本。山や川が荒れては、健全な国家とは決して言えない」と訴えました。

森林や山の恩恵を受けて、川下の私たちの暮らしは成り立っています。森を守るためには、林業の再生や地域の活性化は欠かすことが出来ません。

エコノワでは今回、身近にある貴重な資源「天竜美林」を活かすための有識者からの提言、行政・団体の様々な取組みを紹介します。



写真は金原明善翁が1888年に植林した瀬尻国有林。高齢級人工林施業の参考林として展示されている。このように手入れの行き届いた森林は少ない。

浜松の森林・林業をめぐる課題と提言

浜松学院大学 現代コミュニケーション学部・教授

静岡県森の力再生事業評価委員会 委員長 佐藤 克昭氏

伐採期を迎える森林と林業の停滞

遠州地域は豊かな自然環境に恵まれている。なかでも中核の浜松市は、合併によって広大な地域の68%（10.3万ha）を森林が占めるという、新たな「森林共生型」の政令指定都市となった。浜松市における森林の特徴は、天竜川流域で営まれてきた「天竜林業」と呼ばれる先進林業地としての長い歴史を持ち、全体の8割が民有林であって、そのうちスギ、ヒノキを主体とする人工林率が76%（6.2万ha）と著しく高いことである。戦後の復興造林と拡大造林政策により盛んに植栽された人工林は成熟し（林齢構成は41～60年生が突出している）、ほとんどが伐採に適した林齢を迎えつつある。したがって、これからは蓄積された木材資源の供給可能量が増大すると見込まれている。

一方、わが国の林業を取り巻く環境は厳しく、採算性の悪化、森林所有者の施業意欲の低下、林業産出額・林業所得の減少や、林業就業者の減少・高齢化等が悪循環をなして進行するなど、長期的に停滞している。静岡県の素材生産量をみると、昭和40年の154万 m^3 から約27万 m^3 へと大幅に減少してきたが、天竜川流域の林業地においても、最近は10万 m^3 前後にまで減少するなど、すう勢的に林業生産の低迷が続いている状況である。

持続可能な森林経営の確保が課題

本来、森林資源は再生可能であり、木材の生産資源にとどまらず、生物多様性の保全、土砂災害の防止や水源のかん養等の国土保全、二酸化炭素吸収による地球温暖化防止など、実に多面的・公益的な機能や働きを有している。

こうした森林の価値の大切さは、とくに1990年代以降、地球環境問題への関心が高まり、「持続可能な社会」の形成が国際的な共通理念として認知されるようになったことを背景に、改めてクローズアップされている。これまでの大量生産・大量消費・大量廃棄型社会から資源循環社会への転換が不可欠といえ、森林についても「持続可能な森林経営・管理」を行うことによって、（１）木材資源としての安定供給と（２）森林そのものが有する多面的な機能の発揮を両立させることが、実現すべき基本的な方向性といえる。

しかし、肝心の林業地においては、林業の不振により、林業に依存する山村集落の崩壊が進み、人工林を育成管理する人が足らず、間伐の遅れが目立つなど手入れが滞っており、国土保全等の公的機能も危うさを増している。

昨年12月、農林水産省は、わが国の森林・林業を再生していく指針となる「森林・林業再生プラン」を策定した。10年後の木材自給率50%以上（平成20年24%）を目指すべき姿とし、理念として①森林の多面的機能の持続的発揮と、②林業・木材産業の地域資源創造型産業への再生、③木材利用・エネルギー利用拡大による森林・林業の低炭素社会への貢献を掲げている。



木材の需要創出と安定供給体制の構築を

森林・林業をめぐる環境変化や、行政施策の動向も踏まえながら、今後への課題と展望について述べてみたい。

第一に、増大する潜在的な木材供給量の有効活用をどう図っていくかである。

今後の国内における木材需要は、人口減少等の社会的変化もあり、住宅着工量の減少などから、今後漸減していくと予測される。他方、世界的な木材需要の増加などから、外材から国産材への回帰（シフト）が見られ、新たな需要の開発とともに、外材に代わって利用される取り組みが必要とされる。

需要の大きい住宅産業に向けては、林業・木材産業が連携することにより、計画的な木材供給を促進するとともに、ハウスメーカーや工務店、大工等のニーズに合わせて、品質の確かな製材品を安定供給出来るサプライチェーンの構築が求められる。とくに、ロットが大きく、一定品質の製材品を定量・定時・定価で求めるハウスメーカーのニーズへの対応が課題といえよう。

また、森林と都市、生産地と消費地が一つの圏域となった浜松市の特質を活かし、市内材を使用した木造住宅に対して助成する「天竜材の家／百年住居（すまい）る事業」や、公共建築物への利用などを通して、地域材の魅力を分かりやすく伝え、地産地消を促がす取り組みを盛り上げていくべきである。

林業の競争力強化、森林認証を通じたブランド化

第二は、林業生産の競争力を高める取り組みを強化することである。

森林施業の集約化や路網の整備等を促進するとともに、林業事業体（森林組合と民間事業体）は、先進的な林業機械やシステムの導入などにより、生産性向上と低コスト化を図る必要がある。そのためには、担い手の確保、人づくりが課題であり、教育機関や森林・林業研究センターとも連携しながら、専門的能力を有する森林・林業技術者や林業労働者の育成と配置を進めねばならない。

最近注目されるのは、浜松市天竜区および北区引佐地域のうち18,400haについてF S C森林認証を受けたことである。今後、地域の加工、流通業者がC o C認証（※FSC認証された森の木材からできた製品であることを管理・証明する認証制度。森林から消費者までの全過程の認証が“チェーン”で結ばれていることが必要なため、“CoC（Chain of Custody：管理の連鎖）”と呼ばれている）を取得することにより、環境材としての付加価値を高め、天竜材のブランド化を目指している。林業活性化に結びつける展開を大いに期待したい。

また、外材は、中国等新興国の需要拡大、ロシアによる丸太輸出関税の大幅引き上げなどの影響を受け、輸入量が減少、国産材との価格差も縮小する傾向である。こうした変化の中、韓国や中国へ天竜材の試験的な輸出も報じられた。輸出コストや為替変動の問題はあるが、新市場の開拓に向け、的確な輸出先ニーズの探索や、付加価値の高い製品輸出への取り組みが望まれる。

都市部と山村部の交流・連携促進による活性化

第三に、都市部住民・企業と森林地域との交流・連携の促進である。

浜松市森林・林業ビジョン（平成19年3月策定）は、「すべての市民が協働し、森林資源を活かす価値ある森林を創り、世界に発信し、次世代へ継承する」と謳っている。

ただし、治山治水や水資源の確保など、山側の恩恵を受けている都市部住民の森林・林業への理解や関心は、まだまだ十分とはいえず、人の往来、交流の活発化を基点として、一体感の醸成を促進することが求められる。

そうした観点から、都市と森林をつなぐボランティア団体やNPOの役割が増している。子どもたちを対象とした森林・環境教育や間伐等の森づくり支援など、その活動とネットワークの広がりを評価し、大きな力とすべきである。

また、社会貢献活動の一環として森づくりに取り組む企業も増えている。

さかのぼれば、浜松地域に機械金属産業が起こったルーツは木材、製材産業であった。林業においても異業種との交流・連携を促進し、新たな技術の開発やノウハウの導入などにより、活性化を図っていくことが有効と思われる。

「バイオマスタウン構想」においても、産学官民の連携によって、間伐材など未利用資源の活用、エネルギー技術・システム開発などにより、新たな森林産業やビジネスの創造につなげる推進を目指すべきであろう。

折しも、新東名高速道路や三遠南信自動車道の建設が進み、山間地の交通・交流基盤が着実に整備される見通しである。森林資源を活かしたグリーンツーリズム等の体験型観光、六次産業化によるビジネスの創出など、魅力情報発信も通して交流人口の増加に弾みがつくと予測される。三遠南信の地域連携による広域観光・環境ネットワークの形成も期待されるところだ。

森林・林業再生のモデル地域へ向けてチャレンジを

経営学の泰斗であるP・F・ドラッカーは、「世の中の認識が変わるとき、イノベーションの機会が生まれる」と述べている。

グローバルな環境意識の高まりや、CO₂削減目標における森林整備の果たす役割、森林価値の認識変化を追い風にして、伝統的な林業地に変革が生まれるチャンスとしたいものである。

とりわけ、地域の林業者、製材業者、山林所有者、大工など、木にかかわる仕事をしている若者が集まる「TENKOMORI～天竜これからの森を考える会」など、モチベーションが高く、次代を担う行動力ある後継者たちの活躍に期待し、大いにエールを送りたい。

林野庁は山村活性化の社会モデルを構築する目的の調査で、天竜林業地を全国の林業地を再生する重点調査対象地域としてモデル構築を図るとした。

森林・林業を取り巻く環境は大きな転換期を迎えているが、持続可能な森林経営の実現、林業地の活性化に向けたチャレンジにより明日を拓きたい。

佐藤 克昭氏

浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 教授

1966年 同志社大学経済学部卒業後、静岡銀行入行。1977年より（財）静岡経済研究所に出向し、専務理事、副理事長などを歴任。2008年6月に退職、佐藤経済研究所を開設し、ローランド（株）社外取締役役に就任。2009年4月より浜松学院大学 教授。

■専門分野

経済・産業・企業経営・地域開発等の調査研究、行政施策支援・評価など

■公職

静岡県森の力再生事業評価委員会会長、静岡県労働審議会会長、
静岡県次世代育成支援対策地域協議会会長、静岡県企業局経営評価委員長、
浜松市大規模店舗立地審議会会長、浜松市総合計画策定委員会委員、
NPO法人日本食茶の会顧問 他多数



（参考）

「平成22年版 森林・林業白書」（林野庁 編）

「平成22年度版 静岡県森林共生白書」（静岡県）

「浜松市森林・林業ビジョン」（浜松市） 他

天竜林業復権のために

静岡県西部農林事務所 天竜農林局森林整備課 成瀬 利彦氏

浜松市では、市が核となり森林組合や県などが協力し、天竜美林においてFSC森林認証認定面積を54,000haまで拡大する目標を設定しています。

県は、浜松市が掲げる天竜美林において『「育てる林業」から「売る林業」への進化』の実現と、「品質」と「環境」に優れた天竜ブランドの創出と安定供給を市と連携して目指していきます。

県のできる役割としては、①林業普及指導員が有する森林・林業に関するノウハウ（スペシャリスト、コーディネーター、サポーターとしての普及指導力）を活かして、浜松市と連携すること。②多様な森林づくりや流域の保全、木材の安定供給、森林環境教育の支援等推進などが考えられます。

また、『天竜美林』を活かすためには、「天竜材」の利用拡大を軸に林業を再生することが重要であると考えられます。

なお、今後の『天竜林業の復権』＝「競争力のある天竜林業への最初の一步」は、地域の人々が個人の私欲だけでなく「みんなでまとまってやろうという『森林施業の集約化』」が必須条件となっています。

一方、県では平成18年度より、荒廃して、緊急な整備が必要な森林に対して「森林づくり県民税」を財源に「森の力再生事業」実施しています。

冒頭に挙げたFSC森林認証取得による情報発信と「森づくり県民税」を財源として「森の力再生事業」を実施すること自体、浜松市南部の住民の方々に北部森林の大切さをPRし、地域の材をもっと買ってもらうためのPR手段として2本柱の働きがあります。

しかし、あくまでも「森づくり県民税」を財源とした「森の力再生事業」は期間限定の初期整備を目的としているため、この森林の荒廃を継続的に防ぎ、持続可能な森林管理・経営を目指すことが『天竜林業の復権』には必要不可欠なものと言えます。

静岡県の取り組み

浜松市は市町村合併で一体感があるが一方で、天竜区から北は過疎化が進んでいるようにも感じられます。

こうした中で、育てる林業から売る林業へ進化させるには、森林・林業・木材の需給者である浜松市南部の人々をターゲットにPRして行かなければならないことは明確なことです。

また、忘れてならないことは、起死回生の一手は、昔の先人たちの努力により築かれた天竜林業（＝経験）に固着するだけでは無く、可能性とパワーのある若い関係者（人材育成）から生み出される、「新しい『天竜美林』『天竜林業』」を築いていくことこそ一番重要なことと信じています。



森づくり県民税「森の力再生事業」パンフレット

「天竜美林の応援団」募集中！！

浜松市農林水産部森林課 藤江 俊允氏

「森林は大切ですか？」と質問されたら、多くの方は「YES！」と答えるでしょう。ただ、実際の生活の中で、その大切さや必要性を感じることは意外に少ないかもしれません。「私には関係ないもの」と思っている方も中にはいるのでは...？

浜松市の山間部には、先人たちの努力により築かれた天竜美林があります。市内の森林面積は10万ヘクタールと非常に広大で、市域全体の68%。そして、その多くが人の手によって植林された森林（人工林）というのがこの地域の特徴です。

しかし、近年、木材価格の低迷などにより、管理が行き届かず、手入れの遅れた森林が多くなっています。人の手で植林された人工林は、手入れをしなければ荒廃してしまいます。

この森林の荒廃を防ぎ、持続可能な森林管理・経営を目指そう。そして、現状を知ってもらい、大切さをPRし、地域の木材をもっと買ってもらおうと考え、浜松市では、市内の6森林組合や静岡県などと協力し、平成22年3月3日、市内の森林18,400haにおいて国際的な認証制度である『FSC TM森林認証』を取得しました。

このFSC森林認証は、国際的に統一された基準をもとに、第三者機関が「森林が適切に管理されているか」を審査・認証する制度です。認証の取得には、希少な動植物への配慮や河川・溪流の水質に対する注意など、さまざまな環境的な配慮が必要です。

そして、この一つひとつのチェックを進めることは、実際の森林管理に携わる方々にとっても、改めて森林が多くの分野に影響を与えていることを再確認するきっかけになっています。これにより、浜松市では、より意識レベルの高い森林管理が進んでいます。

水や酸素を供給し、多くの生命のすみかとなる大切な森林。この管理は、今まで、森林所有者や森林・林業関係者が中心となっていました。

ただ、これからは、それに加え『市民一人ひとりが大切な森林を支えていく仕組み』が必要だと思います。そのために、浜松市では、FSC森林認証を活用し、これからも森林からの情報・メッセージを発信していきます。

みんな、きっとどこかで森林とつながっているはず。ぜひ、森林を支える『天竜美林の応援団』になってください。

F S C

（Forest Stewardship Council：森林管理協議会）

会員制の非営利組織で１９９３年に誕生。

F S C森林認証制度は、世界中全ての森を対象としています。認証された森に由来する木材・木／紙製品には、独自のロゴマークがつけられます。このロゴマークが付いた製品が、世の中に広く流通し、積極的に選ばれるようになると、適切な管理をしている森が増えることにつながります。

これは、森を育てる人から、木／紙製品を製造・販売する会社、そして製品を使う人までが一緒になって、世界の森林を健全にすることで、地球環境を守ろうという取り組みです。

F S C森林認証を取得

平成２２年３月３日、浜松市内の天竜区及び北区引佐地域の森林のうち、１８，４００ｈａがこのF S C森林認証林として認められました。

今後、浜松市森林・林業ビジョンに掲げる『「育てる林業」から「売る林業」への進化』を実現させるとともに、「品質」と「環境」に優れた天竜ブランドの創出と安定供給を目指します。

林業は山をデザインする仕事

有限会社 天竜フォレスター 代表 今井 保隆氏

今井さんの生まれは神奈川県藤沢市。1982年日本大学農獣医学部林学科卒業後、龍山村森林組合へ1ターン就職。その後90年に仲間と（有）天竜フォレスターを立ち上げた。同社は森林組合や山林所有者からの依頼で山の手入れや丸太の生産を請け負う。3月下旬から4月中旬に苗を植え、6月下旬から8月は下刈りや徐間伐（若い木を間引いて森に適度な太陽光を入れる作業）、そして秋から伐採を行っている。林業技術者としての立場から「仕事としての林業」について語っていただいた。

環境問題の深刻化や経済状況の急激な変化で、山や林業が注目されるのはとても嬉しいことで、以前に比べ我々の会社にも幅広い年代の方から働きたいという希望があります。しかし環境問題への関心から林業を志す、という方は林業現場とのギャップで悩むことが多いです。最初の大体3年間位は、現場で作業や山のことを覚えていただかななくてはならない。体力的にはキツイ仕事です。その段階を経て山主さんへの提案・営業ができるようになります。しかし、最初は苦労して仕事の基礎を学ぶということは、どの業界でも同様で、林業が特別ではないと思います。また、よく誤解されるのですが、林業はサラリーマンと同じように通勤で可能な仕事なのです。当社の社員でも、浜松の市街地から通っている者もいます。他の仕事と違うところを挙げるとすれば、50年、100年先を考えて仕事をする、という点でしょうか。気候も大きく変動しているし、山は自然ですから日々刻々と変化していく。木材の需要にしても、先々どんな木が売れるかなんて、誰もそんな先の時代のことはわからないわけです。将来に渡り、森林を守り、資源を循環させていけるよう山をデザインしていく。これが林業の面白さだと思います。

今は、天竜の林業にとって大きな変革期です。これまではどちらかといえば閉鎖的な業界だったのですが、若い林業家たちがTENKOMORI※のような活動を通じて同業者間でも技術や人の交流、また外部への情報公開を積極的に行っています。供給側の人材はまだ足りないのが現状ですから、特に若者には林業という仕事について知ってもらい、チャレンジしてほしいと思っています。人の手によって木が植えられた人工林は、人の手が入らなければ資源として循環させることは出来ません。そのためには林業をもっと低コストで生産性の高い産業に変えていかなければならないと思います。これからは、流通や販売、先端技術などのノウハウを持つ会社や人が関わってくれるようになれば可能だと考えています。天竜の林業にはまだまだ可能性があると思います。

※「TENKOMORI～天竜これからの森を考える会」

天竜の林業、製材産業、山林所有者、大工など木に関わる仕事に就く若者が集まり、2007年に発足した森林環境教育団体。行政や地元企業と連携し、市内の小中学校で森林のはたらきや林業の重要性を伝える

出前講座や、木工やチェーンソーの実演といった体験活動を行い、森林・林業の大切さを伝えている。



間伐材を使った割り箸作り

割り箸が、森と人との「かけ箸」に

特定非営利活動法人 せきれい 施設長 安達 進氏

日本人が使用する割り箸の総数は、年間約250億膳。そのうちなんと98%が海外、主に中国から輸入されている。木材価格が非常に安い海外では、割り箸をつくるために原木が使われる。一方、日本では割り箸をつくる目的で伐採される木はない。すべての割り箸が、丸太から建築用材などを切り取ったときにできる端材や残材や間伐材が有効利用される。

NOP法人「せきれい」は、天竜杉で知られる浜松の北部、天竜区にある。天竜杉の間伐材や端材を使って割り箸をつくる作業所だ。ここは障がいを持った人たちが働く施設でもある。一般の会社にて働く場を得ていた彼らの中には、不況によって職を失ってしまった人たちも多い。「せきれい」はそんな人たちの新たな雇用の場としての役割も担っている。施設長の安達進さんにお話をうかがった。

「私たちは、天竜区上野で45年にわたり地元の杉等で割り箸をつくってきた工場を引き継ぎ、平成20年6月から『割り箸作り』に取り組み始めました。つくっているのは『利久箸』と呼ばれる、主に料理屋さんやホテルなどで使われている中・高級の箸です。どなたにも安心して使っていただけるよう、防カビ剤、漂白剤などは一切使用せず、心を込めて丁寧につくっています。美しい木目、ほんのりと漂う木の香りが、食事をさらにおいしく、楽しくしてくれるはずですよ」。

「せきれい」の割り箸は、薬剤を使わずに、熱風乾燥をしているため、安心・安全だ。さわやかな杉の香り、きれいな木目、漂白しないため色はまばらだが、それもいい味になっている。手にすると馴染む曲線もいい。塗りでない、生の、箸、木の箸のよさを再認識する、そんな割り箸だ。日本には、古くからこうした木の良さを味わい、さらには端材や間伐材を有効に利用する木の文化があったのだ。

「せきれい」は地元産業のPRにも貢献している。ラベルなどで天竜産の割り箸であることがわかるような工夫を、さらには国産の割り箸を使うことの意義までも伝えていくこと、それが今後の課題でもある。

価格はもちろん、廉価な中国産よりはずっと高くなる。しかし、間伐材を放置しないことは、土砂崩れなどの災害を防ぐことにも役立つ。国産材を使った国内産割り箸が普及すれば日本の森林と山村を、継続的に経済的に支えることのできるアイテムになり得るのだ。天竜の森を、日本の森を守るために、国産の割り箸を積極的に使いたい。そして、海外の森林を過剰に伐採する輸入の割り箸に対してはできるだけ「NO!」と言っていきたい。丁寧につくられた「せきれい」の割り箸は、手にする人を自然にそんな気持ちにさせてくれる。



使うことで、障がいを持つ人びと、地元の林業家、さまざまな人々が天竜の森とつながる大切な「かけ箸」だ。

地元の木を使う。地元の人を使う。

森、木材、市民をつなぐ「天竜材」の可能性。

浜松の広大な森林を活かすため、地元の木材業界の発展のため、そして、市民が誇れるブランド「天竜材」を立ち上げるため。今、木材業界で新たなイノベーションがはじまっている。その先導役となっているのが浜北区にある（株）鈴三材木店。今も昔も不変である天竜材のすばらしさ。その認識をいかに広め、いかに浸透させていくのか。鈴三材木店の取り組みと展望を紹介する。



「天竜材」の可能性

安価で大量にある、という理由だけで「それなら輸入木材で」という傾向が進み、いまや国内の伐採業、製材業は減少の一途を辿っているのが現実だ。もちろん静岡県西部も例外ではない。天竜材という優美で高品質な木材を有しながら、長年、外材や県外材に対抗しうる需要価値と、供給体制をつくることができなかった。

そんな中、ある起爆剤が投下される。それは平成18年に浜松市でスタートした地域材利用推進事業「天竜材の家 百年住居事業」だ。内容は、浜松市で生産・加工された地域材を使用した木造住宅（新築、増築）に対し、その費用の一部を助成するというもの。これが、地元・天竜材の新たな利用促進、そして広大な森林活用に向けての大きな一歩となった。

ブランド「天竜材」を打ち出せるように

事業の先導役として手を挙げたのが、木材業界の老舗・鈴三材木店。「天竜材の需要をいかに増やすか」をテーマに掲げつつ、これまでの業界全体の対応の遅れを痛感してきたと言う。行政と民間とが連携して行う事業にいち早く身を投じることは、鈴三材木店の経営方針を具体化するのはもとより、衰退の一途をたどる地元材木業界の意識を目覚めさせたいという狙いもあった。代表取締役の鈴木諭氏はこう語る。「ブランド『天竜材』というコンセプトを掲げ、地元の人達に天竜材の価値を打ち出せるようにしたかった。地元の材木業界が生き残るための方向性を示したかったんですね。そのきっかけとなったのが百年住居事業だったのです」。



百年住居る事業に付随した3つの取り組み

「百年住居る事業」に賛同した鈴三材木店は、事業に付随した3つの取り組みも独自に開始した。ひとつ目は、社内に、天竜材のみに特化した販売促進部を立ち上げたこと。2つ目は、家を建てる人たちを対象に50棟分の「天竜杉柱1棟分プレゼント」を実施し、エンドユーザーに直接天竜材の良さを知ってもらえるよう、工務店に働きかけたこと。そして3つ目は、国際的な認証制度であるFSC※1・CoC※2認証の取得である。CoCとは、製品が森林から消費者に届くまでの過程、つまり製造、加工、流通に至るまでの過程において「適切に管理された森林からの製品」ということを保証するもので、鈴三材木店は、「百年住居る事業」に参加する企業の中でいち早くこの認証を取得した。さらに、FSCに関する勉強会を開催し、今後CoC認証取得を目指す企業に対してのあっ旋活動も行っている。

鈴三材木店が認定取得の取り組みに精力的に動いているのには理由がある。それは、次なる「百年住居る事業」とリンクしているからだ。これまで40万円が上限だった助成金だが、2010年度からは、浜松市内で生産、加工されたFSC認証材を使用することで、助成がさらに20万円プラスされることになった。FSCのCoC認定を取得することは、天竜材のPRにとってなくてはならないものなのだ。「ゆくゆくは『百年住居る事業』に参加するすべての企業がCoC認証を取得し、ブランド「天竜材」というコンセプトとの2大看板で、天竜材の魅力を増大させていければと思っています」。

※1.FSC（Forest Stewardship Council）＝森林管理協議会のこと。本部はドイツ。

※2.材を生産する森林と、その森林から切り出された木材の製造、流通、加工のプロセスを認証する国際機関。FSC認証は、森林認証と加工・流通過程の管理の認証（CoC）の2種類。ちなみに浜松市は市内の6森林組合、静岡県などと協力し、今年FSCの森林認証を取得している。

魅力ある天竜材を`売れる、ようにする

鈴三材木店が目指すビジネスモデルは「魅力ある天竜材を売れるようにする」ことだ。伐採業や製材業には、とことん`良い製品（乾燥・強度供に基準をクリアーしエンドユーザーから見て魅力ある製品）を作ること、に専念してもらい、工務店などのエンドユーザーに近いところでは`天竜材の商品価値、を存分にアピールしてもらおう。流通を担当する鈴三材木店は、そのつなぎ役として製品の安定供給はもちろん、認証取得のあっ旋、販売促進部によるマーケティング、キャンペーンなどを通じたPR活動に取り組み、その情報や成果をもとに木材業界の方向性を示していく。つまり、業界全体の発展＝鈴三材木店のビジネスチャンスと捉えているのだ。「浜松市は市域の約70%が山林で、かつ人口80万人をかかえる政令都市。地域材の`地産地消、が可能なのは全国でも浜松だけでしょう。だからこそ、やる必要があるし、やる価値があります。高品質で耐久性に優れた天竜材をもっと地元市民に浸透させていくことができれば、私たち木材業界の発展のみならず、いまある豊かな山々の緑を持続可能な状態に保つことができるのです」。



株式会社 鈴三材木店

〒434-0041 静岡県浜松市浜北区平口5584-12

TEL 053 (585) 1000 FAX 053 (585) 1017

E-mail: info@suzusan.jp

<http://www.suzusan.jp>

雲を耕す

天竜美林再生に向けて



雲は空で生まれ、巡り巡って森の大地に潜り込む
大気を流れる風は、森に息を吹き込み、そこで眠る
大地と空とを結ぶ森は、酸素と水の天然貯蔵庫
夜明けの光とともに、地中の空気と水を空に還す
光合成は命の源、地球生命史36億年の絶えることのない証し
雲を耕して、宇宙の原理を感知する

雲を耕す

戦後最初に流行った歌は『お山の杉の子』でした。「コレコレ杉の子 起きなさい」とお日さまが声をかける。大きくなって皆のためお役に立ってみせると、すくすく杉は大きくなっていきます。天竜の杉も、天竜美林として世に知られるようになりました。

あれから65年、杉の子に悲しい運命が待っていたとは思ってもありませんでした。お役に立つどころか、邪魔者扱いにされるようになったのです。国産材で家を建てる人が、少なくなったからです。

木を伐ると手間がかかるといって、誰も手をつけようとしません。山は荒れるに任せて、これという対策もないまま手をこまねいているばかり。枝が重なり合って、樹はのびのびと枝を広げることができません。森は息苦しくなってきました。

国土の68%が山地ならば、わが国の大半は荒廃した土地で占められているということになります。砂漠の国々と同じです。

嬰兒（みどりご）がミルクも与えられず放っておかれたら、どうなるのでしょうか。これじゃあ、あんまりです。NPO法人「雲を耕す会」は、天竜美林の再生に向けて、立ち上がりました。

鬱蒼とした森の中は暗い。山林に手を入れて、林床に光が届くようにすれば、どんぐりは芽を伸ばします。木々が落ち葉を積もらせば、土に還って、肥沃な寝床をつくります。森の土壌に水と大気が詰め込まれて、地球の命を蓄えることができます。私たちが太古のDNAを森のなかで呼び覚ますのはそのためです。人類は森から生まれたのだと...

「雲を耕す」という語句は、道元禅師の「釣月耕雲（ちょうげつこううん）」からきています。「月を釣り、雲を耕す」。魚でなく月を釣る気持ち、畑でなく雲を耕す境地、それは真理の華を咲かせることです。

また茶事では世俗を超越し、月を釣る心で湯を汲み、雲を耕す心で茶をたてるといいます。月を釣り、雲を耕して、古風を慕う無所得、仏法永遠の風流です。

海上で発生した雲が循環して山に雨を降らせます。山からほとぼしる清水は、やがて海に注ぎ、森の栄養をもたらせます。山なくして魚は育ちません。森は海の恋人なのです。

昔、北遠地方では、焼畑に火を入れるとき、雲の動きを読んで決めました。山仕事、農作業は雲を耕すことと同義でした。



雲を耕す会のシンボルです。

雲を耕す会が行ってきた間伐の成果は、環境省主導の「J-VER=ジェー・バー」となって実現しました。「J-VER」というのは、間伐した区域の5年間の二酸化炭素吸収量を公式に証明してもらい、その数量を「カーボン・クレジット」という形で流通、させることがねらいです。山地は、低炭素社会に向けて、大きく前進しようとしています。

具体的には、地元の企業などに間伐を支援してもらえる可能性が出て来ました。企業としても、「クレジット」という形で証明された二酸化炭素吸収量があれば、支援がしやすくなります。温暖化対策として二酸化炭素の排出削減が叫ばれる昨今、社会貢献を目指す企業にとって、「J-VER」は朗報です。

山を無視していれば、いつかヤマの神からしっぺ返しをくらいます。自然界の循環を妨げている今日の状況を、山の人とともに切り開いていきたいと思っています。

山に息を吹き込みましょう。生命力に人の意思が伝わると、大きな覇気が変わります。

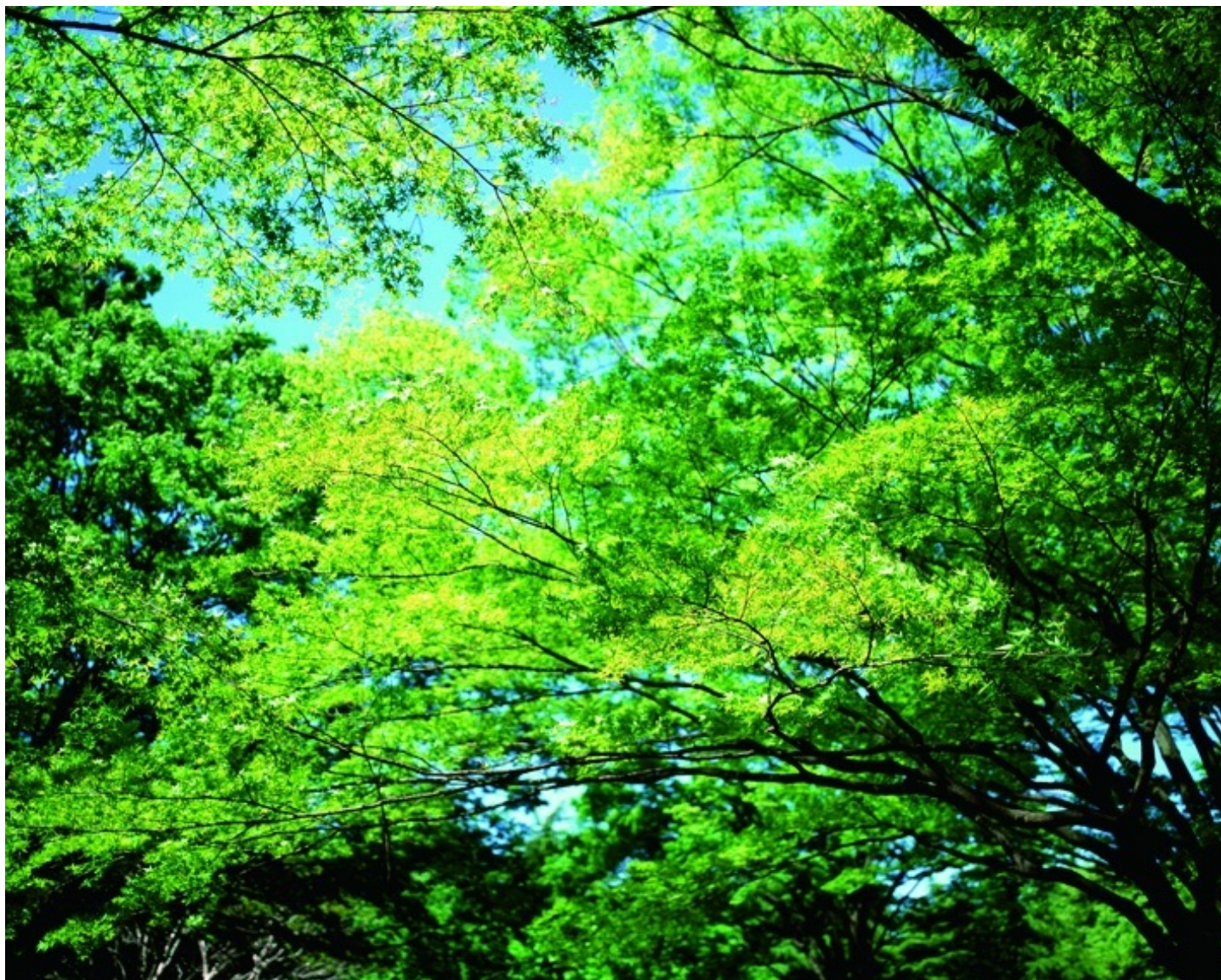


春野を流れる清流

NPO法人 雲を耕す会

URL <http://www.kumo-t.jp/>

お問い合わせ kumo-t@qc.commufa.jp



「人の手をかけない」新しい視点からの森づくり

静岡理工科大学 学長 荒木 信幸氏

天竜美林は、スギやヒノキなど産業目的に植えられた針葉樹林。

しかし、これらの人工的な林は当然「人の手による」管理が必要とされる。

これとは別のアプローチ---「人の手をかけない森づくり」に取り組んだのが佐久間町の植林事業「みんなでつくるふるさとの森・佐久間」。この事業の中心人物の一人である、静岡理工科大学学長・荒木氏に話を伺った。

佐久間町では「子供たちの生命と健康を守る会」とNPO法人「がんばらまいか佐久間」が「人の手をかけない森づくり」にチャレンジした。これは潜在自然植生の研究者として有名な宮脇昭先生が提唱する「宮脇方式」※の考え方を採用したもので、人の手を入れ続けなければならない針葉樹に頼るのではなく、その土地本来の潜在自然植生、つまり常緑広葉樹を中心とした照葉樹林によって森を再生するというアプローチです。照葉樹は針葉樹に比べて根を張る力、それにとともなう保水力にも優れ、土砂崩れを引き起こしやすい山の斜面を守る役割にも長けています。また、これから訪れる高齢化社会を考えた上でも、なるべく手のかからない、なおかつ永続的に緑を保持できる方法を模索することは大切なことだと考えました。

※宮脇方式とは

理学博士・宮脇昭氏が提唱。その土地本来の潜在自然植生の木群を中心に多数の樹種を混ぜて植樹する、混植・密植型の植樹法

「人の手をかけない」新しい視点からの森づくり

平成18年にスタートした植林事業「みんなでつくるふるさとの森・佐久間」では、佐久間ふれあい運動公園の入り口付近に、前述のNPO法人会員、守る会会員をはじめ、小学生（広沢小、浦川小）、高校生（城北工高）や市民の方々など約600名近くの参加者とともに植樹を行い、森づくりの大切さ、地球環境について、さらには天竜川の水源地保護のあり方を考えるきっかけとしてさまざまな成果をあげることができました。1200平方メートルの土地に184種類・1017本もの苗木を植えるところからスタートし、腐葉土を入れたり、雑草を除去したりと最初の3年間はある程度のメンテナンスが必要でしたが、現在ではそれらのメンテナンスもほとんど不要になり、苗木は背丈ほどの大きさまでに成長しています。植樹前には現地の有志たちによって、植樹エリアの枯れ木や雑草の除去、地崩れ防止フェンスの撤去なども行われました。植樹後は「植樹祭一周年記念」、広沢小学校の生徒たちを招いて行われた交流会（年1回）など、さまざまなイベントを開催し、地域の人たちの交流の場、自然環境に対する啓蒙活動的な役割も継続しています。また、ある佐久間町の業者が植樹場所に寄付という形で作業者の安全確保のための柵を設置してくれたというエピソードも登場し、単に「木を植えました」に留まらない、予想外のうれしい広がりや地域交流の芽も生まれてきています。

これまでの森づくりというのは、商業用として生産性を第一に考えた人工林や、その過程で発生する間伐材の有効利用などがメインテーマに挙げられてきました。しかし、私たちと佐久間町の人々が取り組んだのは、商業ベースではない新しい視点からの森づくりです。森林の景観と環境保全というベーシックな部分を追及し、その中で、地域の交流のきっかけも生み出していく。こういった活動は、環境保全意識の向上とともに、人と森、人と人といった「地域のつながり」を再認識させてくれる良い機会になるのではないのでしょうか。今後も地域、企業、さらには教育機関などと連携を強めながら、ボランティアだからこそできる、多様性のある森林保護の観点を見つけていけたらと思っています。

静岡理工科大学 学長 荒木 信幸氏

静岡理工科大学学長。

（社）静岡県環境資源協会理事・会長、
しずおか環境・森林フェア実行委員会委員長、
椎ノ木谷保全の会代表、子供たちの生命と健康を守る会会員など、
県や市町の環境関連の要職やボランティア活動にも尽力している。



この余りある恵み、ツカワヌデオクベキカ

資源としての浜名湖

静岡県西部のさらに西側に位置する浜名湖は日本でも有数の汽水湖であり、ウナギ、ノリ、カキ、スッポンの養殖など商業的な側面でも私たちにとってなくてはならない存在。

また、周辺はリゾート地として開発されている箇所も多く、ボートやウインドサーフィンなどのマリンスポーツをはじめ、その名は全国にも知られている。

しかしどうだろう？静岡県西部に住む人々はあまりにもその存在が近すぎて実は「本当の浜名湖」を知らないのではないか。

そこでエコノワはその恩恵に奢ることなく、この豊かな浜名湖を「資源」としてもっと有効活用できないか、と考えた。

そして今後の課題を踏まえながら、より明るい未来を目指すべく、

「浜名湖・愛」を堂々と表現し、クリエイティブな活動を行っている企業、団体を紹介。浜名湖を知れば、きっと県西部の未来も見えてくるはずだ。

■歴史を知る

母なる奥浜名湖、水の国。

浜名湖の北側、背後に緑深い山を配したこの地域は湖北五山に代表されるように仏教文化の栄えたところ。また、姫街道や秋葉路などの街道もあり、多くの人々が行き交ったと考えられます。この地域は奥浜名湖と呼ばれ、その言葉の響きも含め、いにしえの歴史と文化を感じさせる場所です。今年、2010年はこの地の井伊谷を治めていた井伊氏の始祖共保公の生誕からちょうど千年。さらに歴史のロマンを感じられる場所になりました。

この地には古くから水にまつわる話が多くあります。共保公は、井伊谷の井戸で生まれその水を産湯につかったと言われています。また、井伊氏の歴史が始まるまだ前、古墳時代には水を祀る豪族がいたそうです。平成になってからその全貌が明らかになりつつある「天白磐座遺跡」は、どうやら水を祀るための礼拝の場だったらしいのです。この地と水との関係はその地名にも現れていて、「井伊谷」の「井」は辞書で調べると...

1 井戸。掘り抜き井戸。

2 湧（わ）き水や川の流水を汲み取る所。

とで調べられます。また、「引佐」も「聖なる井がある地域」という説もあるぐらいです。古くから奥浜名湖には豊かな水があったと考えられます。

その豊かな水は、奥浜名湖の多くの川を伝って浜名湖に流れ込んできます。都田川をはじめ都田川に合流する、神宮寺川、井伊谷川、三ヶ日方面では、釣橋川、日比沢川など。また、その水は三岳山や富幕山などのさらに奥、愛知県との県境の深山を水源としています。浜名湖の豊かな生態環境は湖北五山のような数多くの神社仏閣が守ってきた奥浜名湖の森の恵みを受けた水によってつくられたとも言えるでしょう。

■生態系を知る

生物多様性と浜名湖の課題

豊かな生態環境

今年、2010年は国連の定める国際生物多様性年です。名古屋では生物多様性条約締結国会議（COP10）が開催されました。COP10では、人間も含め、生きものたちが繋がり支え合って生きていけるよう、「みんなで自然や生物を守っていこう、そのためにどうしていくのか」が話し合われました。

浜名湖でも豊かな生態環境を学ぶことができます。浜名湖は海の水が入り込む「汽水湖」であるため、川と海の魚介類が700種以上も生息している水産資源の宝庫で漁業も盛んに行われています。この豊かな魚介類の生物多様性を支えているものの一つにアマモ場があります。アマモは、海草の一種で、その群生場所「アマモ場」は、産卵場や魚介類の赤ちゃんの養育の場になり、『海のゆりかご』と呼ばれています。浜名湖ではアマモ場が自然のまま残されており、東海道ではここだけと言われています。そのアマモ場を市民に理解してもらうために観察会なども行われています。

また、浜名湖は魚介類だけでなく、浜名湖全域でカモ類の野鳥の飛来地として知られています。中には、海水を飲む野鳥「アオバト」が観測されるなど貴重な自然として保全が求められています。

最近、もともと浜名湖にいなかった「ツメタガイ」などによって、浜名湖のアサリが被害を受けるなど、生態系のバランスが崩れています。この他に、環境が変わることでギフチョウ・コアジサシなど絶滅の危機に直面する生きものも見られるようになりました。



海水を飲む貴重な野鳥「アオバト」写真提供：日本野鳥の会・細江

浜名湖の水が変わる！

現在、浜名湖の水環境では二つの課題が指摘されています。一つは、地形的な要因からくる夏の湖底の水の貧酸素（酸素が少なく生きものが住めない環境）・富栄養化で、もう一つは、浜名湖の水の塩分濃度が上昇する問題です。浜名湖の水が外洋の海水に近づいており、漁業者からは海で獲れるような魚が湖内で獲れたり、アサリの生息が北化しているなど、魚介類の生態系の変化を指摘する声が聞かれます。

貧酸素・富栄養化や塩水化に関しては、都田ダムや今切口の導流堤の影響を指摘する人がいますが、元東海大学海洋学部教授の松田義弘先生によると、「都田ダムの整備と今切口の導流堤が貧酸素・富栄養化や塩水化に影響を与えているとは立証できていない」と述べています。

都田ダムは農業や上水などの安定的な水の供給ができるなど産業の発展、生活利便性の向上に寄与してきました。今切口の導流堤は潮の流れをスムーズにし、浜名湖の水質の改善を担う面もあります。人の生活に近い浜名湖の水環境は、人の暮らしや経済と自然とのバランスをとりながら、多角的に考える必要があります。



アマモの大切さを知らせる「観察会」

ラムサール条約の登録へ

浜名湖地域の環境保全に取り組む市民団体・企業・行政・学校・研究機関らによって構成される「はまなこ環境ネットワーク」では、貴重な自然環境を守り伝えていくための目標として、浜名湖を国際的な湿地に関する条約「ラムサール条約」への登録を提唱しています。ラムサール条約は、特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約で、締約国159カ国、全国37地区が登録されています。すでに登録されている地区では環境保全・活用のための地域の取り組みなども行われています。豊かな浜名湖もラムサールという共通の目標を掲げて、市民の環境に対する意識高揚を狙っています。

本年9月30日、浜名湖を含む県内4カ所、全国172カ所がラムサール条約湿地の「潜在候補地」に環境省から選定されました。ただし、登録の実現には自治体の賛意と市民・企業など民間の理解と協力が不可欠となります。また、登録には、国レベルの保護担保措置（国鳥獣保護区指定など）などの条件を整えることが不可欠とされています。同ネットワークでは、ラムサール条約に関する情報収集や市民レベルの啓発活動を継続的に実施しています。



はまなこ環境ネットワーク

浜松市中区常盤町133-13

「NPO 地域づくりサポートネット」

Tel.053-455-0220

<http://hamanako-kankyo.net/>

■水質を知る

猪鼻湖をみかんがきれいにする日

浜名湖の西の奥にある猪鼻湖は20年前ぐらいから水質が非常に悪くなりました。生活排水などいろいろな理由が挙げられるが、「三ヶ日みかん」もその原因のひとつ。みかんの生産に多くの肥料が与えられ、その豊かな養分の一部が眼下の猪鼻湖に流れ込みました。湖水は富栄養化し、多くのプランクトンを生み水質を悪化させました。

猪鼻湖の水質環境を良くしようと活動している「わらの会」。群馬高専の小島先生の指導のもと、西陣織りの炭素繊維をいかだにつり下げて湖内に設置しています。設置して約6年、いかだの周りにはエビや魚が増え産卵場所にもなるなど、既に水質浄化の成果が出ています。

その「わらの会」の新しい取り組みがこの冬から始まります。炭焼き窯でいかだにつり下げる炭を作る。しかも材料となるものはすべて、みかんの生産過程で出る廃棄物で、剪定したみかんの木の枝や廃木、青いうちに間引いたみかんなどです。炭素繊維でなくても「炭そのもの」で水質浄化に役立つことは、数年前から実験で実証済みです。三ヶ日の宝である「みかん」、同時に水質悪化の要因にもなった「みかん」を使って、水質浄化に役立てるというユニークな発想は、地域のことを考え活動してきた人たちだからこそ生まれたものです。

予定では、年内には炭焼き窯が完成。2月には第1陣の炭づくりが行われます。この窯でできた炭や木酢液は、水質浄化に使われるばかりでなく、販売したり、新たな商品開発に使う構想もあります。また、子供たちの炭焼き体験や他の団体と炭焼き作業を通じた交流の場にもしたいと考えています。

三ヶ日での環境課題への取り組み。これを「三ヶ日みかん方式」と名付けるならば、これからは「三ヶ日みかん」だけではなく、「三ヶ日みかん方式」も全国の注目を浴びることでしょう。



わらの会

浜松市北区三ヶ日町津々崎342-2

Tel.053-524-2525

猪鼻湖の水質浄化をする炭素繊維を吊したいかだ。

ここに三ヶ日みかんから作られた炭が吊されることになる。

■交通を知る

舟運構想が浜名湖の文化を創る

「舟運」とは聞き慣れない言葉ですが、舟を使い、人や物を運ぶことをいいます。以前は物流の中心を担っていましたが昭和30年代以降のモータリゼーションにより衰退していきました。ここ浜名湖でも明治9年に蒸気船が登場し、掘留運河を使って、現在の浜松市中区菅原町から湖西市を結んでいたと言われます。

その後、定期航路も設定されるなどして昭和40年頃には、浜名湖全域を結んだ航路がありました。しかし、昭和52年に浜名湖観光汽船が廃止され、現在では浜名湖遊覧船（サゴエnEnterプライズ（株））のみとなってしまいました。

サンアントニオの水辺再生やソウルの清溪川再生など世界各地で水辺を活かした再生が行われるなど、最近では環境や防災面、さらに観光資源として「舟運」の価値が見直されています。ここ浜松では、浜名湖、佐鳴湖を活用した「舟運都市浜松」というまちづくりを考えるために、平成20年10月「浜名湖地域舟運都市構想研究会」が発足しました。

研究会では昨年の「モザイカルチャー世界博」に合わせて、浜名湖サービスエリアに船着き場を設け、会場近くの舘山寺と船で結ぶことを提案しました。残念ながら実現はしませんでした。その発想は浜名湖における新しい着目点として大いに注目されました。現在は、「浜名湖を身近に感じてもらうこと」を目標に、浜名湖ガーデンパーク内水路を拠点にした湖上遊覧について企画を進めているとのことです。

浜名湖では、その周りの水際や景色を楽しむことは出来ませんが、その中（湖上）で浜名湖を感じる機会が圧倒的に少ない。たとえば、弁天島まで電車で行き、そこから舘山寺まで船に乗って飲みに行く。楽しそうではないですか？船を使った舟運交通網が実現・整備できれば、もっと身近に浜名湖湖上に出ることができます。湖上での体感や浜名湖の魅力の再発見を生み、浜名湖に今までにはない新しい発想の、新しい価値、文化が創造できる可能性を秘めています。

浜名湖地域舟運都市構想研究会

（代表：中村信吾 中村建設（株）代表取締役社長）

事務局

浜松市中区助信町27番5号

Tel.053-475-5573



昭和50年の鷺津汽船場。最後の汽船。これを最後に浜名湖を東西にむすぶ汽船が姿を消した。
写真提供：（資）西郷カメラ店

浜名湖で遊ぶ。知る。守る。

■安全対策を知る

浜名湖で遊ぶ。知る。守る。

ボートクラブカナル 代表柴田昌宏

9月14日（水）15日（木）、「はまなこ・むらくし海の駅（ボートクラブカナル）」にて、「水辺の防災レスキュー検証会」が行われました。このイベントは、世界の水準に比べると、日本のレスキューがあまりにも脆弱であることに危機感を持ったカナルのオーナー柴田昌宏氏の呼びかけで行われたものです。イベントでは、日本や世界の救助艇の現状や事故ゼロ運動の報告があったり、最新の救助器具やシステムなどが紹介されると共にカナルから浜名湖での救助艇が提案されました。

「日本でのレスキューは非常に遅れている。みなさんご存じの『海猿』は海上保安庁の専門の組織で専門の装備も持っています。しかし、川や湖になると、とたんに疎かになる。管理する行政も管轄自体も怪しかったりします。浜名湖でも何か事があった場合、横の連絡体制もできていないという状況です。ましてやレスキューのための装備はバラバラで、救助艇さえもしっかり持っていない。私たちは、その分野での基準を提示したかったのです。」

柴田氏をはじめとする浜名湖ボートクラブ・カナルでは、様々な「遊び」を提案してきました。浜名湖でのルアーフィッシングのために適した「カロライナ・スキップ」の輸入。大人の遊びのベースであるマリーナの雰囲気づくり、等々。「やっぱり気持ちよく遊びたいでしょ。遊ぶからには思いっきりやりたいし、いい気分になってもらいたい。マリーナ内のサイン看板はすべてアメリカ製。いい感じでしょ。」今年の春には、「浜名湖は、アソビのベースキャンプだ！」と銘打ち、「はまなこボート&スポーツショー」を行った。そのイベントには、マリンレジャー関連ばかりでなくアウトドアやキャンピングカーなど「遊び」に関するメーカー、ショップが一堂に会した。

「私たちは本気で遊んでいますし、それを提案しています。浜名湖での安全に対しては、私たちにも『遊んでいる者』として責任があると思っています。今回のようなイベントを通じて、消防・警察・民間そして漁協が協力し合って、共通の認識が作りたい。漁業者であろうと観光客であろうと誰もこの浜名湖では不幸にはなってもらいたくないですからね。とにかく『やる』ということが重要ですね。」

イベントで提案された浜名湖のための救助艇の名前は「カインドスマイル号」、ある少女の思いを名前にしたそうです。ここにも柴田氏の本気度が伺われます。

ボートクラブカナル 代表柴田昌宏

海の駅認定100番目の「浜名湖ボートクラブカナル」オーナー。浜名湖での「遊び」の提案もすることながら、浜名湖海の駅連絡会にも加盟し、遊びの中にも災害への備えや、身近な海辺の安全を守るため積極的に活動している。

ボートクラブカナル

浜松市西区村櫛（むらくし）町4607-13

TEL:053-4 8 9 -2 8 7 7

<http://www.bc-canal.com/>



浜名湖の救助艇として提案された「カインドスマイル号」（手前）とマルチパーパスな「カロライナ・スキッフ」（奥）。

結論：浜名湖は使える。

浜名湖は観光地である。憩いの場である。リゾート地である。漁場である。自然に触れる場である。生活の場である。

浜名湖はいろいろな面を持っている。だから「これだ」というイメージがなくなんとか中途半端。でもそれがいい。そういった浜名湖の多様性がこれからの可能性を秘めているのだ。

浜名湖には魅力がいっぱいある。東海道の真ん中に位置し、近隣地域には約100万人が住みながら、自然環境はまだまだ豊か...。その魅力を活かすのは、新しい発想と行動力。「異端」というエネルギーが新しい浜名湖を創るのだ。

エコノワは、浜名湖の魅力をあえて資産と呼ぶ。なぜならそこにはビジネスチャンスがあるから考えるから。

この資産、ツカワヌデオクベキカ。

What's URAHAMA?

三ヶ日みかんや竜ヶ岩洞だけが奥浜名湖じゃないんだ。

奥浜名湖ならぬ裏浜名湖（通称：ウラハマ）。

地方の地方、奥の裏だからこそ、人を惹き付ける魅力的なコンテンツが集まる。

サブカルチャー発信基地、怪しいキモカワ系キャラ、湖沿いのライブハウス、幻のソフトクリーム。

ドライブで通り過ぎるのだけでは勿体ないあなたの知らない「ウラハマ」。

奥浜名湖の表も裏もどうぞご堪能あれ。

ウラハマ【裏浜名湖】

〔造語〕奥浜名湖の旧引佐郡（細江町・三ヶ日町・引佐町）に集まる、マイノリティーカルチャー（文化）の総称。また、それに関わり、地域を活性化しようとする人物、モノ、場所、イベント。平成十七年に旧浜松市と合併し新浜松市の一部となったが、浜松中心部から離れているため、現在でも奥浜名湖独自の文化が育ち、集まっている。

（エコノワ大辞典）

ウラハマ発信、キモカワ系キャラ「うなみかん」が増殖中

What's URAHAMA?

ウラハマ発信、キモカワ系キャラ「うなみかん」が増殖中



浜名湖産のうなぎを父に三ヶ日みかんを母にもつ地元ならではのキャラクターとして「足"跡」のクリエイターの手によって誕生したうなみかんとそのファミリー。ちょっと不気味だが、見ているとだんだん癖になるやさぐれ顔で地元発信キャラとして人気に。地方からのオリジナルキャラクターの発信を提案。キャラクターとしての魅力を活かし、コラボしてくれる企業募集中。うなみかんグッズは「足"跡」にて販売。

浜名湖うなみかん協同組合

静岡県浜松市北区三ヶ日町都筑2303

TEL&FAX:053-526-7331

<http://www2.odn.ne.jp/k-gallery/una>

足"跡と書いて「アジト」と読むぜ！

What's URAHAMA?

足"跡と書いて「アジト」と読むぜ！

ウラハマカルチャーの発信基地

ウラハマを象徴するスポット「足"跡」は、奥浜名湖で活躍中のクリエイターが集まるショップ。クリエイターにしか出来ない事、クリエイターだから出来る事でオリジナルのサブカルチャーを発信して、地方を盛り上げる。シルバー/レザークラフトの「龍力」、お祭り用品の「い志や」、CG・映像・フィギュア作家の「電腦大工」も営業中。うなみかんの生まれ故郷でもある。



足"跡（アジト）

静岡県浜松市北区三ヶ日町都筑2303

TEL&FAX:053-526-7331

<http://www.eff-f.com>

あの幻のソフトクリームが 三ヶ日で復活！？

What's URAHAMA?

あの幻のソフトクリームが 三ヶ日で復活！？



伝説的な美味しさで奥浜名湖で知らない人がいない気賀四つ角のソフトクリーム屋が10年以上前に突然閉店した。時が経ち、当時の味を復活させたのは三ヶ日インターを出てすぐの「物産館マルニ」。優しくまろやかな舌ざわり。100円で買える贅沢。エコノワ編集長も大絶賛の逸品。初めての人も、懐かしい人も、幻のソフトクリームを食べるために奥浜名湖ヘレッツラゴー。

物産館マルニ

静岡県浜松市北区三ヶ日町都筑2212-1

TEL:053-526-7012

<http://maruni.hamazo.tv>

大地のリズムが細江に集まる 細江の魂が地球に拡がる

What's URAHAMA?

大地のリズムが細江に集まる 細江の魂が地球に拡がる



細江町気賀の落合橋交差点の近く、民家に紛れてDjembe専門店「JALI」がある。アフリカの民族楽器ジャンベや、エジプトのダラブッカなど、普通の楽器屋さんでは置いていない民族楽器が所狭しと置いてある。大地の恵みの太鼓を叩いてみよう。きっと地球を感じるはず。魂が太鼓と共鳴していく。大地の鼓動と自分の鼓動がリンクしていく・・・どう？地球を感じた？営業日は毎週日曜日。場所がわかりずらいので、わからなかったら電話で確認を。

Djembe Shop 「JALI」

静岡県浜松市北区細江町気賀160-1

TEL:053-523-2986

<http://www.jali.biz>

ウラハマ唯一のショットバー 酒と涙と地産と地消

What's URAHAMA?

ウラハマ唯一のショットバー 酒と涙と地産と地消



ウラハマでショットバーと言えばここ「KENBAR」。奥浜名湖の人達が一杯の美酒と絶品フードを求めて集まる社交場。ここに来れば、奥浜名湖の表も裏も右も左も分かる。ウラ情報によると地元を愛してるマスターは地産のモノを使った○△□▽◇の開発を企んでいるらしい・・・。

KENBAR

静岡県浜松市北区三ヶ日町三ヶ日349-5

TEL:053-524-1239

<http://hamanamura.hamazo.tv>

浜名湖畔のエコノワ的ウラ遊び場 ゆったり生ライブならここ！

What's URAHAMA?

浜名湖畔のエコノワ的ウラ遊び場 ゆったり生ライブならここ！



浜名湖沿いにひっそりと佇む、カフェ＆ライブハウス。車を止め、階段を上がり、入り口の扉を開くと素敵な音楽が出迎えてくれる。そしてステージのバックに広がる浜名湖。オフ日に生Liveを聞きながら、音楽に身を委ねる。食事をしながら、会話をしながら、景色を見ながら、あの頃を思い出しながら。浜名湖の自然と極上の音楽を共に味わえるよくばりなエコノワ的ウラ遊び場「WATTS」。定休日は毎週火曜日。ライブスケジュールはお問い合わせを。

WATTS

静岡県浜松市北区三ヶ日町大崎64の6

TEL:053-526-2261

<http://live-watts.com>

エコノワ VOL.3_ライト版

<http://p.booklog.jp/book/25959>

著者 : econowa編集部

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/econowa/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25959>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25959>